

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要

論 文 題 目

年少者日本語教育における  
「実践研究」の意味を考える  
—JSL 中学生への日本語支援実践を通して—

井口 翔子

2010年3月

## 第1章 日本語を母語としない子どもたちをめぐる研究と課題

日本語を母語としない子どもたちの成長を支える教育の重要性が叫ばれて久しい。これらの日本語を母語としない子どもたちをめぐる課題について、どのように関心が寄せられてきているのだろうか。第1章では、日本語を母語としない子どもをめぐる研究の流れ、および、年少者日本語教育の課題を整理したうえで、本研究の目的と本論文の構成を述べた。

1-1. 「日本語を母語としない子どもたちをめぐる研究」では、日本語を母語としない子どもたちをめぐる研究の流れを、石井（2009b）から概観した。そして、この日本語を母語としない子どもたちをめぐる大きなふたつの研究の流れとして教育社会学にみられるような「教育システムを問い返す研究」と、年少者日本語教育に代表されるような「実践を探求する方法」を示した。

1-2. 「年少者日本語教育の課題」では、川上ほか（2004）などからその課題を概観したうえで、年少者日本語教育の専門性を担うのは多様な文脈における支援者であることを示した。そして、年少者日本語教育の基本理念（石井 2009a）が現場に生かされていないことを指摘し、その課題解決の方法として池上（2009）が教育の実践を開示する必要性を提示することに言及した。

このような考えにもとづき、1-3. 「本研究の目的」では、次の2点を設定した。

- (1) 年少者日本語教育における実践研究の意味を明らかにすること
- (2) 筆者自身の実践から、年少者日本語教育における知見を明らかにすること

つづく1-4.では、本論文の構成を述べた。

## 第2章 「実践研究」という方法

第2章では、「実践研究」という方法論について先行研究を整理し、本研究における「実践研究」の方向性を示した。

まず、2-1. 『「実践研究」とは何か』では、教育学や、臨床教育学、臨床心理学、教育社会学など様々な研究領域において現場に根ざした研究が注目されていることを示し、これらがどのように「実践研究」を特徴づけているのかを考察した。具体的には、実践研究の目的、実践と理論の関係、研究者、実践者の立場、実践研究の方法といった側面から検討した。

次に、2-2.「日本語教育、年少者日本語教育と『実践研究』」では、両者において「実践研究」がどのように捉えられているのか、細川(2008)や川上(2009a, 2009b)、池上(2009)などから検討した。

つづく2-3.「『実践研究』の評価」において、この方法論がどのような評価をされているかについて述べた。具体的には、佐藤(2007)や横溝(2005)が示すように、「実践研究」が新しい知見の提示や研究としての成果を示すことの課題があるという指摘を検討した。これらをふまえて、2-4.「本研究の立場」では、筆者自身の実践研究に臨む立場を提示した。本論文における「実践研究」において、筆者は自身の実践における問題の把握を提示し、実践の文脈に見出すことのできる理論を提示することをめざすこととした。

### 第3章 JSL 中学生に対する日本語支援実践

第3章では、筆者自身の実践の全体のプロセスを明らかにすることを目的とし、第2章で述べた本研究の立場から、筆者の日本語支援の詳細を記述した。

3-1「実践研究の概要」では、実践研究の対象である日本語支援の概要、生徒と支援者のプロフィールを述べたうえで、本章の構成、および使用するデータについて述べた。筆者の日本語支援の概要を表1に示す。

表1：日本語支援の概要

期間	2008年9月～2009年7月、計37回（代講2回を含む）
生徒	首都圏公立中学校3年生（支援開始時2年生）
形態	週1回2時間の「取り出し指導」（2008年9月のみ週3回）

つづく3-2から3-7では、この日本語支援を時系列に追って記述した。ここでは、約10か月間の支援を、表2のように、中学校の学期、および長期休暇で区切り5段階に分け、それぞれの段階において中心となる実践を【実践0】から【実践8】とし、それぞれの実践について記述した。

表 2：日本語支援過程の概観

支援の段階	実践内容	
<第1段階>2008年度前期	【実践0】「初期指導」	
<第2段階>2008年度後期前半	【実践1】「国の紹介ポスター」	【実践2】「物語の要約」
<第3段階>2008年度後期後半	【実践3】「対話作文」	
	【実践4】（第5段階として記述）「日本の生活」	
<第4段階>2009年度前期	【実践5】「アンケート活動」＋	【実践6】「国旗のはなし」
	【都市の紹介ポスター」	【実践7】「第二次世界大戦」
<第5段階>帰国直前	【実践8】「学習のまとめ」	

#### 第4章 実践を通しての考察

第4章では、第3章の実践の記述にもとづき筆者自身の実践が、年少者日本語教育においてどのような知見を提示できるのかを考察した。実践の中から見えてきた問題意識を整理し、筆者の実践から年少者日本語教育における知見を提示することをめざした。

まず4-1.「実践の中から見えてきた問題意識」では、筆者の実践を貫く次の3点の問題意識を提示した。これらの問題意識について、つづく4-2.から4-3.で考察した。

- (1) どのように子どもの日本滞在・日本語学習の意味づけを支えられるか
- (2) どのようにJSL中学生の発達を支えられるか
- (3) どのようにJSLの子どもの人間関係構築を支えられるか

4-2.「どのように子どもの日本滞在・日本語学習の意味づけを支えられるか」では、齋藤（2009）の「ライフコース」の視点をふまえ、短期滞在の日本語を母語としないこどもを支える視点として、日本滞在・日本語学習の動機を支えること、帰国後日本滞在を意味づけられるようなしかけをつくること、自分の人生における現在の位置を見出すことを提示した。

4-3.「どのようにJSL中学生の発達を支えられるか」では、Gibbons（2002）の統合型教育の意義をふまえ、短期滞在のJSL中学生に関わった視点からその重要性を示した。筆者自身、来日初期の中学生の日本語支援や、一時的な滞在を予定している子どもの日本語支援などでは、教科内容を扱うのが難しいと考えがちであったが、本実践研究におけるJSL生徒の実態から、どのような支援形態や文脈であっても、認知的発達を最大限支えること

の必要性を示した。

4-4. 「どのように JSL の子どもの人間関係構築を支えられるか」では、筆者自身が本実践研究全体を通して課題として残すことになった問題意識について論じた。

## 第5章 年少者日本語教育における「実践研究」の意味

第5章では、年少者日本語教育における実践研究の意味を筆者自身の実践研究から明らかにすることを目的とし、本論文における結論として提示した。

5-1. 「実践研究の分析」では、「実践者の問題意識」にあらわれる実践者の教育観が、実践研究を通してどのように変容していったのかを検討した。具体的には、「日本語支援で扱う題材選択の視点」と「子どもの日本滞在を捉える視点」の変化を、支援者の教育観の変容として述べた。

つづいて5-2. 「実践者にとっての実践研究の意味」では、筆者自身が第3章、および第4章の実践研究を記述することによって、実践研究にどのような意味を見出したのかを述べた。具体的には、「教育観の形成と気づき」、「理論を主観的に文脈の中で構築する」ことである。

そして、5-3. 「年少者日本語教育における『実践研究』の意味—様々な相互作用—」では、本論文における結論として、相互作用という視点から4点を論じた。この4つの相互作用とは、第一に、子どもと実践者の相互作用であり、これによって実践研究においては具体の課題解決がめざされる。第二に、実践と実践者の相互作用であり、実践研究を記述することは実践者が実践から学ぶことを意味する。第三に実践と理論の相互作用であり、「実践研究」が具体の事象のもつ年少者日本語教育における意味を追求するものであることを示した。第四に実践者と実践者の相互作用であり、「実践研究」は「実践的インスパイア」(鹿毛 2009) を他の実践者にもたらす可能性を示した。

本論文の最後に、5-4. 「今後の課題と展望—学びの共同体としての年少者日本語教育へ—」を示した。「実践研究」こそが、様々な文脈における実践者が年少者日本語教育における課題を可視化して理論を構築するという展望である。そして、その公開の場所や議論の空間、また自身の実践者を見つめ直す実践研究のあり方が年少者日本語教育の研究方法として広く利用されることが課題であることを述べた。

## 参考文献

- 池上摩希子 (2009) 「年少者日本語教育における実践と研究—『実践を語る』意味—」川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広編『「移動する子どもたち」のことばの教育を創造する—ESL 教育と JSL 教育の共振—』ココ出版、pp.228-237.
- 石井恵理子 (2009a) 「年少者日本語教育の構築に向けて—子どもの成長を支える言語教育として—」川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広編『「移動する子どもたち」のことばの教育を創造する—ESL 教育と JSL 教育の共振—』ココ出版、pp.142-164.
- 石井恵理子 (2009b) 「JSL 児童生徒の日本語学習支援体制の整備—教員養成・研修を中心に—」野山広・石井恵理子編『日本語教育の過去・未来・現在 第1巻「社会」』凡人社、pp.214-240.
- 鹿毛雅治 (2009) 「誰による、何のための、誰のための実践研究か—教育心理学者による『授業コンサルテーション』を手がかりとして—」『臨床心理学』第9巻第1号、金剛出版、pp.50-55.
- 川上郁雄 (2009a) 「主体性の年少者日本語教育を考える」川上郁雄編『「移動する子どもたち」の考える力とリテラシー—主体性の年少者日本語教育学—』明石書店、pp.12-37.
- 川上郁雄 (2009b) 「動態性の年少者日本語教育とは何か」川上郁雄編『海の向こうの「移動する子どもたち」と日本語教育—動態性の年少者日本語教育学—』明石書店、pp.16-39.
- 川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広 (2004) 「年少者日本語教育学の構築に向けて—『日本語指導が必要な子どもたち』を問い直す—」『2004 年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、pp.273-284.
- 齋藤ひろみ (2009) 「子どもたちのライフコースと学習支援—主体的な学びを形成するために—」齋藤ひろみ・佐藤郡衛編『文化間移動をする子どもたちの学び—教育コミュニティの創造に向けて—』ひつじ書房、pp.251-265.
- 佐藤郡衛 (2007) 「異文化間教育と日本語教育」『日本語教育』132号、p.45-57.
- 細川英雄 (2008) 「日本語教育における『実践研究』の意味と課題」『早稲田日本語教育学』第3号、pp.1-9.
- 横溝紳一郎 (2005) 「実践研究の評価基準に関する—考察—課題探求型アクション・リサーチを中心に—」『日本語教育』126号、pp.15-24.
- Gibbons, P (2002) *Scaffolding language, scaffolding learning: Teaching second language learners in the mainstream classroom*. Heinemann.